

# こじせい

## 第11号

平成18年 7 月

発行所 医療法人山口会

発行者 山 口 継志郎

### ◆ 高知厚生病院の理念 ◆

#### 高知厚生病院の理念

- 1 私たちは、医療を通して患者さんと家族、更に地域の皆様の幸せのために努力します。
- 2 私たちは、心と心が通い合う、温かい医療を目指します。
- 3 私たちは、更に大きくお役に立つために、発展向上を目指します。

## こじちゃんとカフェ

### 1日開催

喫茶レクリエーション

7月5日に喫茶レクリエーションが5階のレストランで行われました。

「こじちゃんとカフェ」と命名された喫茶コーナーに、通所リハビリ 37 名、病棟からは 8 名の方がご来店?! してくださいました。皆さんの熱気と、コーヒーの香りの中、素敵な時間を持つことが出来ました。是非、またやってほしいという希望がたくさんありましたので、ご期待にこたえられるようにがんばります!!



今日はウェイター、ウェイトレス!?



コーヒーと野根まんじゅうに大満足!!

**お知らせ** 8月にホームページがリニューアルしました。 アドレス <http://www.kochi-koseihp.jp>

---

## いのちの神秘

---

副院長 山口 龍彦

太平洋戦争も末期の頃のお話しです。吉江は23歳の農家の嫁。彼女はやっと乳離れした息子を育てながら、出征している夫の無事を祈る毎日を過ごしていました。貧しくはありましたが、農家でしたから食べるものには事欠くことなく、一家団欒の日が一日も早く来ることを願っている毎日でした。ある日のこと。吉江が汗を拭きながら畑から帰ってみると、舅と姑が白木の木箱を前にしておいおいと泣き崩れているではありませんか。吉江はさっと自分の頭から血の気が引いていくのが分かりました。最も怖れていた日がとうとう来てしまったのです。郵便配達人が夫の遺品とともに戦死の報を届けてくれたのです。やっぱりそうだったのか。何週間か前、夢の中で夫が弾にあたって死んでゆく光景をみて、もしやと胸騒ぎを覚えたことを吉江は思い出しました。しかし、こんなことは誰にもいうことができません。一人で不安な気持ちと戦いながら、夫の無事と早い帰還を待ち望んでいたのです。吉江は舅、姑と共に木箱をそっと開けて見ました。するとそこには見覚えのない万年筆が入っていたのです。それだけでした。吉江は「これは夫のものではない」と思いましたが、言うべき先もありません。それよりも、ひょっとすると夫はまだ生きていて、何かの間違いで誰か亡くなった別の人のものが家に届けられたのではなかろうか、という思いもしてきます。義母にもその考えを伝えました。しかし、義母は望みをなくしてしまったのか、首を振るばかりでした。

その夜のことで。吉江は枕元に木箱を置き、眠りにつきました。そして、ふと気が付くと軍服を着た夫が枕元にずっと立っているではありませんか。そして、夫は吉江に告げたのです。「その箱は私の物ではない。箱が〇〇村の△△ところといれかわちゅう。」

夫の告げた村の名前は四里も離れています。吉江は暗いうちから起きだして、木箱と弁当を持ち、息子を義母に無理やり託すと夜明けとともに出発することにしました。夢で逢った夫はやや痩せているようでしたが肌の色つやもよく、元気そうでした。彼女は、夫と逢うことができたのが、夢の中であったのか、あるいは現実であったのかよくわかりません

でしたが、どうしても行って確かめなくてはならないと思ったのです。彼女は体力には自信がありましたし、気も逸るのでその村には思ったより早く到着しました。畑で農作業をしている村人に尋ねると△△の家は確かにあり、迷わずたどり着くことができました。その家のご主人と奥さんに、吉江は木箱の話や夢の中の夫の話をしました。怪訝そうな顔をされるばかり。確かに息子は出征中であるが、戦死の知らせもないし無事であるに違いないとのこと。吉江が諦めて引き返そうとしたその時です。「△△さん、郵便です。受け取りをお願いします。」と小包が届けられたのです。ご主人と奥さんは顔を見合わせ、受け取ると奥へ引っ込んでしまいました。そして、しばらくすると、奥からすすり泣きが聞こえてきます。吉江も事情が分かっているのでも思わずもらい泣きをしてしまいました。「吉江さんとおっしゃいましたね、どうぞ、上がってください。」しばらくして出てきたご主人がいいです。「不思議なこともあるものだと思います。あなたは家の息子が死んでもうたようなことをおっしゃったが、その通りかもしれない。いま、このようなものが届いたのです。」と吉江が持ってきたのと同じような白木の箱を目の前において、「一緒に中を見てみましょう」△△家に届いた白木の箱の中身は帽子でした。手にとってみると何ということでしょう、吉江の夫の名前が書いてあったのです。次に吉江が持参した箱を開け、万年筆を取り出しました。それを見たご主人と奥さんの驚きはいかばかりだったのでしょうか。「これは、確かに倅の万年筆です。間違いありません。ようこれを持ってきてくださいました。」

箱を交換して吉江は帰途につきました。夫が亡くなったことも、戦友だろうと思われる△△さんが亡くなったことも、もう誰もが疑ってはいませんでした。吉江は悲しくはありましたが、夫がそばにいて見守ってくれているような気がして、寂しくはありませんでした。帽子のはいった箱を抱き締めて、農家の嫁として、母として役割を誠実に全うしようと誓ったのです。

この話は、私が創作したものではありません。少し脚色はしていますが、ある患者さんが私に語って

くれた彼女の体験です（名前は変えてあります）。彼女は終戦後も決して幸多い人生ではなかったと思いますが、誠実で正直な人柄でした。彼女は苦しいとき、いつもこの時のことを思い出してはご主人に心の中で語りかけていたに違いないと思います。誰が何と言おうとも、このお話しは彼女の人生にとって「真実の話」であったのです。

あなたの人生を振り返って見てください。人生の別れ道において、何か不思議な体験をされていませんか。そして、そのことがあなたの人生を豊かなものにしてくれているのではありませんか。それぞれ

の人がそれぞれの人生を生きています。死にゆく人の語る「お話し」に、その人生を形作っている「いのちの神秘」を感じずにはられないのです。



## 院内探検



### 高知厚生病院リハビリテーション課

当院のリハビリテーション室は、約240㎡のスペースを確保し病院北棟の1階に設置され、中庭駐車場の四季折々の植物を眺めながら、理学療法士3名、マッサージ師2名、鍼灸師1名のスタッフでリハビリテーションを行っています。

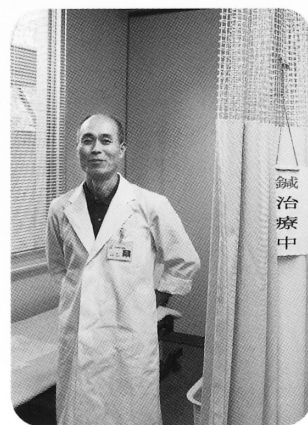
#### ◆理学療法士とは？

身体に障害がある方に対して医師の指示のもと、運動療法などを行うことにより、運動機能の改善、日常生活動作の向上を図るため、専門教育を受け、国家資格を取得した者を言います。



#### ◆リハビリテーション課の基本方針

当院では、主治医からリハビリの処方がでた患者様（各整形外科疾患、内科系疾患）に対し、各理学療法士の担当制とし、その方に合ったリハビリプログラムを作成し、外来患者様、入院患者様（一般病棟、療養型病棟、緩和ケア病棟）に対しマンツーマン指導を実施しています。入院患者様においては、退院時のリハビリ指導、ご家族への介助方法の指導、住宅改修時の段差の解消、手すりの設置なども提案し、入院時から退院後までトータルにフォローさせていただいています。また、週一回、主治医、看護師、相談員、理学療法士により、リハビリをされている患者様のリハビリ経過、今後の方針などを検討する会を設け、患者様がもっている最大限の能力を引き出せるようチームとして対応しています。腰痛、肩こり症の方には、マッサージ師によるマッサージ、鍼灸師による鍼治療（火・木・午前中予約制、外来患者様のみ）も実施しています。

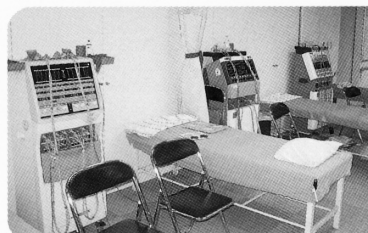


鍼灸師による鍼治療

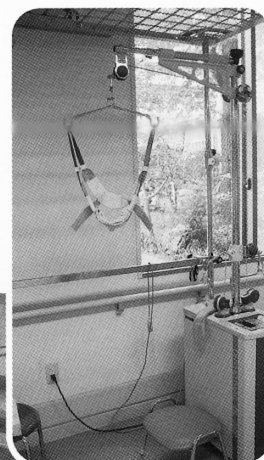
## ◆リハビリテーション室

設備としては、低周波治療器、中周波治療器（手術後早期の筋力強化に有効といわれています）、赤外線治療器、頸椎・腰椎牽引器、歩行訓練などに使用する平行棒、自転車エルゴメーター、訓練用マット、訓練用ベッドなどがあります。また、患者様がいつでもリハビリ室で自主トレーニングができるように重錘バンド、トレーニング用チューブ（セラバンド）も設置し、その都度担当理学療法士が指導させていただきます。

リハビリテーションは患者様ご本人の「やる気」が一番大切です。私たちはそのお手伝いをさせていただき役割だと思っています。体の痛みや、不調がありましたら、自己診断せず医師の診察をお受けになってください。リハビリの処方がありましたら、私たちが全力でお手伝いいたします。



低周波治療器、中周波治療器



頸椎・腰椎牽引器

## リレーエッセイ

### 通所リハビリテーション所長 宮脇健二



自分の田舎について話をさせていただこうと思います。

私の実家は、現在は高岡郡四万十町（旧幡多郡大正町）です。保育園から中学校を卒業するまでずっとクラスメイトは同じでした。中学校の全校生徒は30人程度で、私のクラスは12人。1つ上のクラスは4人でした。そんな小さな学校から、高校は高知工業高校へ進学しました。あの田舎から高知市内へ出て来た時は、人、車、街並み、色々な物に驚き、自分は場違いな所にきたのではないかと、自分は周りから笑われているのではないかと、何か恥ずかしくなり、慣れるまでに時間がかかりました。

15歳で高知へ出て、もう17年になろうとしています。高知での生活にも慣れたはずですが、やはり田舎者は田舎が合っているのでしょうか。何か窮屈で、生活に疲れを感じてしまいます。時々田舎に帰っていますが、その度に（田舎者は田舎…）と感じながら、心と身体を癒した高知へ帰ってきます。二十歳頃にはあまりそんなことも感じませんでしたが、最近は強く感じるようになりました。

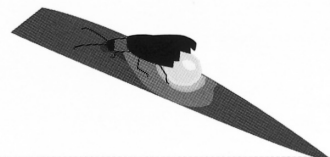
草のにおい、田んぼのにおい、田舎のにおい…。夜は真っ暗ですが、空を見あげるとふるほどの星が見えます。高知の自宅の周りにも田んぼや山や川はありますが、空が違い、山や川が違い、においが違う。本当に何もなくて、遊ぶことも生活するにも不便ですが、そこで生まれ育ったことを本当にうれしく思うし、自分にはまだ子供はいませんが、いつか自分の子供が生まれた時にはあの場所で育てられたらと思っています。自然の中で昔、父や母、祖父母から教わってきたことを自分の子供に伝えられたらと思っています。

昔は実家を聞かれて大正町と口にするのが、田舎者と思われそうで恥ずかしかったです。

でも、今は自分の中では一番好きな場所で、一番誇れる場所ですから、

大正町の田舎者で本当によかったと思っています。

次は、居宅支援事業所 中西由紀子さんをお願いします。



つかの間の晴天に、山にドライブに行くと山の緑の匂いが色々あることに驚きました。甘い桃のような香り、ヨモギの香り、小動物の匂い…などなど。みなさんの夏ならではの楽しみがあれば、是非教えてください。